世田谷村日記　　石山修武

十一月二十六日

八時起床。フィンランドの連中は独特なフィーリングを持ってるな。人口五百万人でスカンジナビア半島に位置する地政学的状況を良く生かしている。しかし最近の建築は総じて良くない。ナショナル・ロマンティシズムをこえるものが出てきていない。アメリカン・インターナショナリズム、つまりグローバリズムに呑み込まれているようだ。

九時四十五分大学。十時卒論発表会。昼食三〇分はさんで二十一時前迄。一人一人に講評するのはさすがにハードである。石山研は一人をのぞいて低調であった。二十一時前世田谷村に戻る。

鈴木博之先生より久し振りに電話いただく。韓国から帰って、すぐカンボジアだそうだ。元気なんだ、と安心する。来春にはプノンペンのひろしまハウスを見てもらえるか。来年は歴史研の発表も聞いてみるつもり。絵本プロジェクトを芸術学校のスタジオで、一部すすめてみたらどうかと思い始めている。ファンタジーとメディアは時代の軸になり始めているように思うのだが、先走りし過ぎているかも知れない。

深夜、「年を歴た鰐の話」再々読。口惜しくて泣きたくなる本である。六〇をこして、どんなに低い背を勢一杯のばしてみても、これには届きそうにないのが口惜しい。山本夏彦のはしがきも、吉行淳之介、久世光彦のあとがきも、徳岡孝夫の解説も、皆ぐるになって一つの物語をでっちあげているような気さえする。やっぱり、シオポール・ショヴォは仮空の作家で、山本夏彦が原作者で訳者のふりをしてみせているにちがいないのだ。そうだとすれば、ルイス・キャロルよりも余程現代そのもののノンセンスなのだと思うが、そう思い込む事にしたい。

十一月二十七日　日曜日

七時起床。十一時前宮脇愛子さんと絵本の話しする。昼前鎌田君等と富士ヶ嶺へ。川口湖インター近くの「砂場」で昼食。十四時半観音堂着。富士山が大きく、雪も少々かぶり絶景である。十八時頃発。途中渋滞に会って二十一時過世田谷村に戻る。今日はエスキスがはかどった。二十二時前我孫子馬場昭道氏、α社長若松氏と連絡。休日は仕事になる。

十一月二十八日

朝フィンランドのラウティオラ教授へＦＡＸ。今日のスケジュールを伝える。十一時半研究室。

十二時陸海。十三時半法政大学渡辺真理さん。十五時半軽井沢Ｏさん打合わせ。十七時半フィンランド、ラウティオラ、カテイネン両氏と打合わせ。インターン、交換留学、北京、パビリオンオブサイレンスの件。進めようという事になる。二〇時過高田馬場文流で会食。二十一時半修了。二十二時半世田谷村に戻る。